

家の家出

石原 三日月

今朝、起きたら家が家出していた。

心当たりはある。ここ数か月ほど夫との口喧嘩が増えていて、家の中はずっと険悪な空気に満ちていた。私も夫もこのままではいけないと思いつつも、お互い仕事が忙しいこともあり、お互い見て見ぬ振りをして日々をやり過ごしていた。一番安らげるはずの家の中が最も居心地が悪かった。だが、家だって居心地が悪かったのだろう。耐え切れずに出て行ってしまった。まだ築三年なのに。

時計を見ると、朝の五時前だった。なのにやけに明るい。それもそうだが、天井も壁も何もかもなくなっているのだから。朝の陽射しが私の布団に直接降り注いでいる。一階の床面は残されているが、壁に接していた備え付けの棚やキッチン、浴槽、それに階段もきれいさっぱり消えていた。接していないダイニングテーブルや電化製品、それに便座は残されていた。白い便座が朝の光にきらきらと眩しい。

リビングに繋がるウッドデッキは残っていて、犬のモクが外に向かって激しく吠えている。ふと見ると、夫も布団から身体を起こして茫然としていた。別々の部屋で寝ているのだが、壁が消えたのでお互いが丸見えだった。

「…ねえ、どうする？」

寝起きで頭が回らないのと、最近まともに会話してないので、夫への話しかけ方がよくわからない。彼の返事もぼんやりしていた。

「そりゃ探さないと…ローンもまだ三十二年あるし…」

この家を購入したのは三年前。結婚を機に二人で家探しをして、この古い住宅街に売り出されていたこの家を見つけたのだ。

この家は少し高台に建っている。ベランダに出ると街を見下ろす形になり、とても気持ちがいい。そして街を超えた向こう側には小高い山があり、その天辺には遊園地があった。そこには名物の大きな観覧車があり、ベランダに立つとちょうど正面に見える。私たちは一目で気に入り、この家に決めたのだった。だが住み始めてから程なく、夫とは何かと言い争いが増え、一緒に休日に出掛けること

もなくなり、その遊園地には一度も訪れることのないままだった。

ウォークインクローゼットは消えていたが、玄関のポールハンガーは残っていた。私たちはパジャマの上から一番裾の長いコートを羽織った。二人の靴と、モクのリードも玄関の三和土に残されていたのは幸いだった。

道路へ出たところで、町内で最年長のご老人とばったり鉢合わせた。朝の散歩らしい。訝しげに我が家を眺めている。

「おはようございます」

平静を装って笑顔を向けた。いろいろと訊かれたら面倒だなと思ったが、

「あー、家出されたのかい」

しゃがれた声でそう告げると、にこりと微笑んだ。私は夫と顔を見合わせた。

「まだ新しい家だったろ、建てて何年だい？」

「…三年です」

「ちようど家が家出する頃だねえ、最初はただ住んでもらえるのが嬉しいだけだったのに、だんだん家も、自分とこの家族はそんな立派なもんじゃないことに気づき始める、そんな年頃だね」

「はあ…」

「初めての家出なら、まあどこか広い駐車場あたりだろう。何回も繰り返すうちには、開発中の宅地に新築の振りして紛れ込んだり、小賢しくなるがねえ」

ふおふおふおと空気の抜けた笑い声を上げた。それに合わせるように、モクが吠えながら回り出す。

「おや、おたくのワンちゃんが知っているねえ。家が出て行くところを見ていたんだらう」

言葉が通じたのか、モクが走り出そうとする。私たちはご老人に促されるまま、モクの進むほうへと歩き出した。

空がすっかり明るくなった頃、街の中心にある大きなショッピングセンターの駐車場に辿り着いた。だが我が家はどこにもいなかった。そこに目星を付けていたので一気に疲労が襲ってくる。私はふらふらと車止めに腰を下ろした。夫は黙って開店したばかりの店内へ入って行くと、二人分の朝食と、モクのおやつを買って戻って来た。そして自分の会社と、私の職場にまで休みの連絡を入れてくれた。

それからまた私たちは歩いた。焦りと疲れのせいもあり、何回も陰悪な空気になりかけたが、その度に「喧嘩している場合じゃない」と互いに我に返った。家を失うかどうかの瀬戸際なのだ。夫とこんな言葉を交わすのは久しぶりだった。

昼も過ぎ、午後も歩き続け、陽が傾きかけた。どこにも家はいなかった。疲れ果てた私は下を向いて、ただ足を動かしていた。不意に彼が大きい声を出した。

「駐車場があるぞ」

指を差す先を見ると、道路の端に大きな看板があった。観覧車の絵と『駐車場は直進』という文字。あの遊園地だ。私たちはいつのまにか街を抜けて、反対側にある山の裾野に辿り着いてしまっていた。

「行こう」

最後の望みはその駐車場だった。

だが、藁をも掴む思いで辿り着いた駐車場にも我が家の姿はなかった。それどころか、休園日なのか一台の車の姿もない。私たちは駐車場の真ん中で膝からくず折れた。

だがその時、モクが走り出した。あっ、と思った時には、夫の手からリードがすり抜けていた。モクは駐車場を走り抜け、そのまま遊園地の入口へと飛び込んでしまった。私たちも動かない足を必死に動かして追いかける。

やはりチケット売り場は閉まっていた。が、その横手にさらに上へと続く幅の広い歩道が伸びていた。矢印付きの看板に『森林公園・大観覧車』とある。道のカーブの向こう側へ跳び込む白い尻尾がちらりと見えた。夫に手を引かれながら後を追うと、曲がった先には夕焼けに染まった芝生の広場が広がっていた。

そしてその向こうに、あの観覧車が立っていた。

予想以上に大きかった。その足元から天辺までを見上げ、私は息を呑んだ。

「見て！」

夫の腕を取る。そして夫も息を呑んだ。

ざっと数えて三、四十個ほどのゴンドラが観覧車には付いていた。いや、ゴンドラではない。

家だった。

無数の家々が巨大な鉄骨の円周上にぶら下がり、ゆっくりと半時計回りに回

転していた。あるものは平屋であり、またあるものは二階建てであり、なかには二世帯住宅かと思われる大きいものもあったが、とにかくすべて家だった。

その観覧車を取り囲むようにして人々が立っていた。夫婦らしき二人組もいれば、独りで立ち尽くしている人、小さな子供を抱いた家族らしき団体もいた。誰もが同じように疲れたような顔で、しかし静かに観覧車の家々を見上げていた。その人影の中から呟くような声が漏れ聞こえた。

「まさかこんなところなんて……園長さんは家に理解のある人らしくて、家出をした家のために観覧車を開放しているんですって……あ、ではお先に」

そう言うと、その人は観覧車乗り場へと進み出た。ちょうど一軒の家が地面へと下りて来て、乗り場で玄関のドアを開いた。その人が入ると扉は閉まった。私はただ呆然として上昇して行くその家を見送った。

ワン、とモクが吠えた。見ると、次に下りて来るのは我が家だった。

家は軽く揺れながらも、凜と背を伸ばしたような雰囲気をもとい、私たちを横目で見下ろしているようだった。

「……俺たちも行こう」

「うん……」

頷きつつも不安だった。家はドアを開けてくれるだろうか。ドアが開いたとしても、床がないのにどうやってなかへ入るのか。そして、こんな観覧車の鉄骨からどうやって連れて帰ればいいのか。

そう思う間にも家は下降し、目の前には見馴れた玄関ドアがあった。モクが吠えると、渋々といった雰囲気ゆっくりと開いた。

飛び込んだモクはすぐ目の前にある階段を駆け上がった。私が飛び乗るとぐらぐらと揺れたが、夫が背中を支えてくれた。そのまま押し上げられるようにして階段を上がる。二階に辿り着くと、思わず同時に大きな溜め息が出た。

二階は拍子抜けするくらい、普段通りだった。ソファにローテーブル、壁に掛けたテレビ……建築メーカーは一階をリビングにする想定的那样だったが、私たちは二階にある広めの寝室をリビングとして使っていた。あのペランダからの眺めを楽しみたかったからだ。

いまペランダの向こうには見慣れた観覧車の景色ではなく、群青色にわずかに朱を滲ませた空が広がっていた。空の高いところでは小さな星がいくつか瞬

いている。

私は掃き出し窓を開けて、ベランダへ出てみた。夫が「危ないぞ」と言いつつ、私の二の腕を掴み、後ろから付いて来た。モクは怖いのか、窓のあたりをうろろろしている。

揺れに気を付けながら手摺りを握りしめ、視線を下へ向けると、私たちの街が広がっていた。ところどころに明かりが灯り、きらめき、まるで息をしているみたいだ。

「まさかこんな風に、この遊園地に来るとは思わなかった……」

私の呟きに、背後で夫が少し笑ったようだった。

そして夫は私の隣に並んだ。二人で街を見下ろす。

「うちはあのへんかな」

指を差すと、

「あのへんだけど、うちは今ここにあるぞ」

真面目な顔でへんてこなことを言った。思わず吹き出すと、彼は一瞬きよとんとした顔をしたが、つられたように笑った。

「二階をリビングにして正解だったな」

「だね」

それから私たちはソファに座り、ぼつりぼつりと喋りながら、窓の外を眺めていた。地面が近づいて来たが、交互に「もう一周」「もう一周」と言い合い、観覧車の家でしばらく時を過ごした。

何周目だったか、モクがクゥーンと高い声で鳴いた。お腹がすいた時の声だ。

私もお腹がすいていた。窓の外を覗くと、ちょうど地面が近づいていた。

私たちはドアを開けて、乗り場へと跳び下りた。家はこの後どうするのだろうか、と振り返ると、ガコンツと大きい音を立てて、家も鉄骨から跳び下りた。そして、ズズズズと左右に揺れながら、ゆっくりと前に進み出した。どうやら一緒に帰ってくれるつもりらしい。

モクが嬉しそうに跳ねながら走り出す。私と夫はそれを眺めながら、家とともに家路についたのだった。